Sherwood Anderson と5人の女性

——精神分析学的考察——

小　園　敏　幸

（1981年6月，梅光女学院大学英語英文学会に於て，口頭発表をした研究論文は本稿を短縮したものである。）

I

シャーウッド・アンダソン (Sherwood Anderson, 1876—1941) は旅行が好きであったようである。(1)

アンダソンは生涯に4度も結婚しているが，その都度，相手の女性と思い出深い旅行をしている。

1913年から1914年にかけての冬の間，彼は初婚の相手であるコーネリア・レイン (Cornelia Lane) と一緒にオザーク山地で長い休暇を楽しんだ。

1915年夏には，恋愛中で，やがて彼の再婚の相手となったテネシー・ミッチェル (Tennessee Mitchell) を連れて，アディランダク山脈を訪れ，彼らはシャタギー湖で過した。1921年には，彼はテネシーとポール・ローゼンフェルド (Paul Rosenfeld) を伴って，フランスとイングランドを旅行した。

1926年12月1日から1927年の春にかけて，アンダソンは，コーネリア・レインとの間に生まれた息子ジョン (John) と娘のマリオン (Marion) と，それに彼の3度目の妻エリザベス・プロール (Elizabeth Prall) を加えて，4人でやはりフランスとイングランドを訪れている。

ここまでは意義深い旅行であったが，アンダソンの最期となったのが，彼の4度目の妻エリナー・コペンヘイヴァー (Eleanor Copenhaver) との

旅行である。

1941年3月5日にアンダソンはエリナーを伴って，国務省派遣の非公式親善使節として，南アメリカに向ってニューヨークを出発した。ところが，翌6日発行の *New York Times* の23ページに，"Sherwood Anderson Ill" という見出しで，アンダソンがパナマ運河地帯で腹部の激痛のために船からおろされたということが報道された。更に，7日付の *New York Times* の13ページには "Anderson Has Peritonitis" という見出しで，アンダソンの腸の病気は腹膜炎を誘発していることがパナマ運河地帯で公式に発表された。そして，その翌翌日の9日発行の *New York Times* の41ページには "Anderson Is Dead; Noted Auther, 64" という見出しで，アンダソンがパナマ運河地帯のコロン (Colon) で腹膜炎のため，その前日3月8日に他界し，64歳であったことが報道された。

検死の結果については，1941年4月10日発行の *New York Times* の15ページに "Explains Writer's Death" という見出しで報道されている。それによると，彼はオードブルについていた木製の爪楊枝をうっかり呑み込んでしまい，それが腸に穴をあけて腹膜炎を誘発した結果の死であった。

アンダソンの遺体をヴァージニア州のマリオン (Marion) に埋葬するために，1941年3月18日，エリナーは遺体と共にパナマ運河地帯を去った。(2)

アンダソンは爪楊枝を呑み込むという不慮の事故によって腹膜炎を誘発し，彼の生涯は呆気ない幕切れとなったが，彼の人生を振り返ってみると，これ程自我に忠実に生きた人も少ないであろう。

本稿の目的はアンダソンを精神分析することにより，彼の女性観を中心に，彼と5人の女性について考察することにある。

アンダソンと係わる5人の女性とは，今迄見てきた4人の女性と，残りの1人は M.D.F. と略して，アンダソンが *Sherwood Anderson's Notebook* (1926)を献じている女性である。M.D.F. はボブズ＝メリル出版社(Bobbs-Merill Publishing Company) に勤務していたマリエッタ・D・フィンリー (Marietta D. Finley) のことである。

II

シャーウッド・アンダソンを精神分析するために必要と思われる彼の生活史を，特に誕生から幼児期に至る過程を簡単にみてみよう。

アンダソンはオハイオ州プレブル郡キャムデン (Camden) で，1876年9月13日に生まれた。それは，農本主義から機械工業による資本主義への移行という激動の時代であった。父親のアーウィン・M・アンダソン(Irwin M. Anderson, 1845—1919) は有能な馬具製造業者であった。しかし，やがて馬具なども大量に機械生産されるようになり，父親の仕事は急激に減っていった。それと共に，彼は飲酒と饒舌に耽溺していった。キャムデンで馬具店をやっていけなくなると，仕事のありそうな場所を求めて，アンダソン家の居所はオハイオ州の町々を転々と変った。ついに自分の店をもてなくなって，父親は小さな工場で働いたり，ペンキ屋になったりした。1884年，一家をあげて *Winesburg, Ohio* (1919) のモデルとなったオハイオ州のクライド (Clyde) という町に居を定めた。だが，満足のいく仕事に就くことが出来ず，父親は益々飲酒に耽り，仲間達を集めてはあいも変らぬ饒舌に耽溺していった。そのために，母親のエマ (Emma Smith Anderson, 1852—1895) が父親に代って一家の支柱にならなければならなかった。

アンダソンの母親は *Death in the Woods*, (1933) の主人公と同様に，所謂バウンド・ガール (bound girl)[3] であった。彼女は幼少の頃から困窮した状況の中で育ったので，どのような仕事であろうとも金になる仕事であれば忍耐強く行ない，苦しい家計の中で，子供達を献身的に愛情をもって養育した。

1880年代から1890年代の初めにかけては，アンダソン家の収入は不安定であったために，子供達も母親を助ける傍ら，新聞の売子などをして学校教育を続けた。特に，アンダソンは母親に感化され，あらゆる賃仕事を精力的に引受けたために，「ジョビー」(“Jobby”)[4] というニックネイムをつけられた。

1895年5月10日に，一家の支柱であった母親エマが過労のため肺結核にかかって亡くなると，父親アーウィンに甲斐性がないために，やがて一家は離散してしまった。

さて，フロイド (Sigmund Freud, 1856—1939) 理論を通して，シャーウッド・アンダソンの生活史を見ると，ここに「エディプス・コンプレックス」 ("Oedipus Complex") の典型的な実例があることに気づく。

アンダソンは幼児期に於て，母親に懐き母親を愛し，父親に対しては反抗的態度をとったのである。その後，普通ならば，男児は母親に愛されたいという願望のために，母親の愛している父親のような人間にならなければならないと考え，次第に男児は父親に近づき父親を模倣するのである。しかし，アンダソン家に於ては，父親は家族を顧みないで飲酒にふける利己的な男であるために，夫婦間の精神的絆はなかったと考えられる。従って，アンダソンは父親を軽蔑し，母親をわがものにし，母親の愛だけを受けて育ったに相違ない。それ故に，彼は母親への依存性が強く，彼の自我像 (Ich-Bild) は母親との二者一体実存を望んでいる。従って，彼は母親と自分とを同一視 (Identification) し，母親の考え方，感じ方，行動の仕方等をそのまま取り入れようとしたのである。故に，母親が賃仕事に精を出すように，彼は金になることならどんなことでもとびついてアルバイトをやり，しかも，そのやり方が機敏で抜け目がなかったので，町の人達から「ジョビー」アンダソン ("Jobby" Anderson) と呼ばれたのである。所謂，アンダソンのリビドー (Libido) はエディプス・コンプレックスの段階に定着しているのである。アンダソンが19歳の時に母親は他界したが，彼女の死はアンダソンにとって，特に痛ましく，まるで恋人か愛する妻と死別したかの様に悲しみは大きかったに相違ない。

大槻憲二は『愛慾心理学　総論篇』の中で，いみじくも，母親に幼児的定着を持っている人間の恋愛態度に於ける特徴は，次の5ヵ条件であることを述べている。

1．彼等は既に思春期になっても，その対象を截然二つに区別する。一方

に於て，対象を高尚な，純潔な女として，それを性交と結びつけて考えるというような事は思いもよらないものとして考えると共に，他方に於てただ性欲の対象であるに過ぎない普通の女を認識すること。

2．彼らはその恋人に対して非常に忠実であって，決して恋人から離れられない心持を抱いているに拘らず，他方に於て幾多類似の恋愛事件を次から次へと惹起して行く傾向を持っていること。

3．彼等は誰か所有者のある女に対して興味を持つ。その女と関係を結べば，必ず「憤る第三者」のある如き，そういう女に対して強く引かされること。

4．性的に悪い評判のある女に興味を持つこと。

5．そういう悪い評判や悪い境遇にある女を救うことに依って，その女を恋人とすること。(5)

リビドーがエディプス・コンプレックスの段階に定着したまま成人した場合，究極的に大別すると，その人の性発現は性倒錯 (sexual perversion) か，あるいは異性の親に似た性格をもった異性にみるのである。

アンダソンにとって，女性の存在価値が如何なるものであったかは，1931年5月11日付のロジャー・サーゲル (Roger Sergel) とルース・サーゲル (Ruth Sergel) に宛てたアンダソンの手紙に見ることができる。

I've never been able to work without a woman to love....They are earth and sky and warmth and light to me....I live by the woman loved.

こうした彼の女性観も，彼のリビドーがエディプス・コンプレックスに定着している結果であろうと思われる。

次に、アンダソンの性格について考察してみよう。

アンダソンは自分の父親が多弁家で話をすることが非常に上手であったことを認めていた。次第に彼はそういう父親に対して親しみを感じ始めたが，同時に，一家の支柱として重荷を母親に背負わせ，家庭を顧みない父

親に対して，彼は憎しみと軽蔑の念を抱かざるをえなかった。ここには情動の両価性，所謂アンビヴァレンス (Ambivalence) をみることができる。

父親と同様に，アンダソンもまたストーリー・テリング (story-telling) の才能を持ち合わせていたことが，彼の友人ベン・ヘクト (Ben Hecht) によって証明されている。ベン・ヘクトはアンダソンについて次のように述懐している。

You couldn't tell whether Sherwood was lying or telling the truth when he spoke of himself....He talked of himself like a man strumming a mandolin. The strumming was not for listeners. He liked to hear stories about himself. I don't know if he talked about himself out loud when he was alone. But that's what he seemed to be doing when others were around.(6)

アンダソンは非常に話好きで，自分の人生を語る時には，imagination と fancy を十分に織りまぜて，即ち事実と虚構を相雑えて，語っていたのである。即ち，彼は口愛性格 (Oral Character) の持ち主であったのであろう。

口愛性格としては，獲得した対象を確保する欲求，しがみつきたいという欲求，快楽主義的傾向，娯楽欲，好機嫌，情操豊かであること，気まぐれ，対象を失うのではないかという不安等が考えられるが，その反面，孤独，隔絶，放棄，放浪，焦燥，性急，外界との非現実的な結合等も表裏一体として包含している。

アンダソンが居所をシカゴ，クライド，ニューヨーク，クリーヴランド，エリリア，ニュー・オーリンズ，リーノー，カンザスシティー，サンフランシスコ，マリオン，ヴァージニア等転々と変えたり，多くの場所を旅行したのは，とりもなおさず口愛性格に特有の放浪癖に原因をみることができる。

III

（初婚の妻コーネリア・レイン）

アンダソンの初婚の相手はコーネリア・レインである。彼女は，1854年にトリード (Toledo) に設立された靴問屋の娘で，1877年5月16日に生まれた。彼女は，自分の隣りに住んでいて，以前クライドに住んだことのある，ゼニー・ビーミス・ウィークス夫人 (Mrs. Jennie Bemis Weeks) から，1903年にアンダソンに紹介された。

コーネリアは1900年6月に Western Reserve University を卒業したが，1904年5月16日の結婚まで，彼女が一体何をしていたかは明らかではない。しかし，*The College Folio* の1901年11月号76ページと，1902年5月号326ページによると，1901年6月から1902年3月まで，ヨーロッパにいたと記されている。そして，1901年11月にはパリに滞在していたこともそれに記されている。

コーネリアはアンダソンとの結婚にあたり，彼は非常に貧乏な家庭に生まれたが，母親は美しい悲壮的なタイプの女性で，父親は無責任なお人よしであったことも，予め知っていたようである。また，彼が新聞の売り子をしていたことも，更に，彼が物事に非常に熱中するタイプであるということも，コーネリアは熟知していた。

アンダソンはコーネリアと一緒に Stevenson の作品をよく読んでいたが，次第に Carlyle, Hazlitt, Tolstoi, Dostoievsky, Borrow 等の作品へと変っていった。彼女はアンダソンに diction や rhetoric 等について熱心に教えたようである。

1907年8月16日に長男ロバート (Robert) が，その翌年1908年12月31日には次男ジョン (John) が，そして1911年10月29日には長女マリオン (Marion) が誕生した。

アンダソンはアメリカの物質主義の好況時代の波にのって，実業家とし

て一廉の成功をおさめたけれども，徐々に神経衰弱(Neurasthenia)になり，1912年11月27日に自分の会社から姿を消してしまった。2，3日後にクリーヴランドで発見されたが，彼は一時的に健忘症 (Symptom of Amnesia) にかかっており，そのまま近くの病院に運ばれた。退院後，彼は自分の会社には戻らずに，シカゴに行き広告会社に勤めることになった。1913年に家族をシカゴに呼び寄せたが，その年の末に彼は再び神経衰弱症状を呈したために，その翌年の夏，彼は家族と別居した。コーネリアはインディアナ州の学校教師になって，3人の子供を連れてシカゴを離れた。

アンダソンとコーネリアの離婚は1916年7月27日に認められた。それ以前に，彼はコーネリアの親友であるテネシー・ミッチエルと既に恋愛中であった。彼とテネシーの間で結婚の意志が固まった後に，彼の方からコーネリアに離婚を申し出たのである。

コーネリアは理知的であったので，アンダソンとテネシーとの関係を察知し，彼らの結婚を心から祝福したのである。ここには忍耐と自己犠牲の生涯を送ったアンダソンの実母の姿を見ることができる。アンダソンがコーネリアと恋愛結婚をしたのは，彼女に母親のイマーゴ (Imago) を求めたからであろう。結局，彼は大槻憲二の言う第2番目に掲げた，幾多類似の恋愛事件を次から次へと惹起して行く傾向を持っているのである。即ち，アンダソンは自分自身の不完全さは棚に上げておいて，完全な女（母）の観念をもって恋愛に臨んでいるために，永久に自分の期待は満たされることはないからである。

彼のリビドーがエディプス・コンプレックスに定着していることを，彼は意識していないので，離婚に対してはあまり罪の意識がなかったにしても，生まれた3人の子供と別れたことは，とりわけ深い罪悪感を覚えたに相違ない。1923年12月，リーノーからロジャー・サーゲル宛に出したアンダソンの手紙に彼の心情がよく表われている。

Well, you have an understanding wife and your children. That is much. I also have three children, but cannot live where they are. I see

them but two or three times a year.[7]

アンダソンはコーネリアとの間に生まれた子供達が学校に入学した頃から，最愛の情をもって，コーネリアとも，3人の子供達とも文通を始め，彼が死ぬまでそれは続けられた。コーネリアと子供達は，その後アンダソンと結婚した女性達とも生涯良い友達であった。

長男のロバートはアンダソンの跡を継いで *Smyth County News* と *Marion Democrat* の editor となったが，1951年，マリオンで死去した。

次男のジョンはシカゴの Kennedy-King College で教師をしている。

長女のマリオンはラセル・スピア (Russell Spear) と結婚し，ノースカロライナ州のマディソン (Madison) に住み，夫と共に *Madison Messenger* の編集をしている。

コーネリアと，アンダソンの4人目の妻エリナー・コペンヘァヴァーの2人はヴァージニア州マリオンに，ある一時期一緒に住んだことがあり，コーネリアが1967年6月に死去する迄，彼女達は非常に仲よしであった。

（2度目の妻テネシー・ミッチエル）

アンダソンの再婚の相手は，彼が *Poor White* (1920) を献じたテネシー・ミッチェルである。

テネシーはミシガン州出身でピアノ調律師と音楽教師をして自活していた。彼女をアンダソンに紹介したのはコーネリアである。彼が1913年にエリリアからシカゴに転居し Chicago Renaissance に加わった折に，テネシーは小説を書くように彼を勇気づけた。

彼がテネシーと結婚したのは，1916年7月31日であるが，それは彼とコーネリアが離婚してわずか4日目であった。コーネリアは彼らの結婚を祝って，子供達にプレゼントをさせた。アンダソンとテネシーは新婚旅行中に，コーネリアと子供達を訪問し，楽しく過した。その翌年の夏には，コーネリアと子供達が，アンダソンとテネシーを連れ立って，シャタギー湖に旅行している。

テネシーは彫刻と創作に興味を抱き始め，性格的にも明朗でユーモアがあったので，芸術家達にも人気があり，彼らにとって彼女は理想の女性であった。

テネシーはアラバマ州モビール (Mobile) の近くで彫刻を始めた。彼女の最初の作品は，アンダソンの *The Triumph of the Egg* (1921) のイラストレイトであり，彼女の "clay people" は常に *Winesburg, Ohio* 的な特徴があった。(8)

1922年，アンダソンはテネシーに離婚を要求するが，彼女はそれを拒否した。彼はテネシーと別れてシカゴを去り，ニューヨークに行く。そこでエリザベス・プロールに出会う。テネシーは離婚に反対であるため，アンダソンは離婚に関する慰謝料の請求も彼女から受取ることが出来ないので，彼は1923年2月から1924年4月迄，離婚裁判で有名なネヴァダ州リーノーで余儀なく過さねばならなかった。

I was in Reno, Nevada. I was getting a divorce from a woman. I rented a little house in a row of many little houses. I had very little money. The woman loved another man. She wanted me to divorce her.(9)

これはテネシーとの離婚に関して，アンダソンが述べたのであるが，テネシーには他に愛する男がいたという証拠は何もない。しかし，アンダソンがテネシーと結婚した情況をみると，彼の離婚請求に使われた文面は一方的で，全くの虚構であるが，一見真実性を漂わせている。何故なら，アンダソンとテネシーとの結婚は，彼女と *The Spoon River Anthology* の著者であるエドガー・リー・マスターズ (Edgar Lee Masters) とのスキャンダルが表面化したので，彼女を守るための手段であったからである。このことは，アンダソンが生涯を通じて親密な友人であったマーコ・モロー (Marco Morrow) に結婚後数年して語っている。(10)

テネシーに対するアンダソンの恋愛態度は大槻憲二の5ヵ条件の中の（4）と（5）に相当する。

テネシーの結婚生活はアンダソンの利己主義のために失敗に終った。彼女は1924年4月，仕方なく離婚を承諾した。その後，彼女は再婚しなかった。しかし，アンダソンは既にエリザベス・プロールと恋愛中で，結婚の意志も固まっていた。

テネシーがその後如何なる生活をしていたのか知る由もないが，1929年12月27日付の*New York Times*は12ページに"Ex-Wife of Anderson, Novelist, Found Dead."という見出しで，テネシーが自殺をしたことを報道している。それによると，12月26日，テネシー・ミッチェル・アンダソンは肺出血で眠るように死んでおり，彼女は，アンダソンの条理のたたない一方的な理由で，1924年に離婚させられた，とある。

テネシーはアンダソンと知り合う5年前にエドガー・リー・マスターズと恋愛をしたが，その頃のことをマスターズは *Across Spoon River* (New York: Farrar & Rinehart, 1936) の Chapter XIV (pp. 295—315) で再現している。マスターズとテネシーの関係は，この作品に於ける彼と Deirdre のそれに見ることが出来るが，テネシーと Deirdre を同一視することが出来ないような差異も存在している。しかし，マスターズは Deirdre を描くにあたり，テネシーをモデルにしたのだと断言している。具体的に，Deirdre について，「彼女は生まれつき淫乱症で，しかも冷淡で不可思議な，とらえどころのない女」である，とマスターズは説明している。さらに，「彼女は私と離別して数年後に結婚したが，やがて彼女の夫は彼女にひどい仕打ちをして離婚した。後に，彼女は自殺した」と述べている。

マスターズはウィリアム・L・フィリップス (William L. Phillips) に宛た1949年5月25日付の手紙で，Deirdre という女性はテネシーをモデルにしたものであるということを，やはり強調している。

（3度目の妻エリザベス・プロール）

アンダソンの3度目の結婚相手はエリザベス・プロールで，彼は彼女に *Tar: A Midwest Childhood* (1926) を献じている。

アンダソンがエリザベスと知り合ったのは，ニューヨークで彼女の経営

する Lord and Taylor bookstore であった。彼がテネシーとの離婚の件でリーノーに行った時には，彼とエリザベスは既に熱烈に恋愛中で[11]，1924年4月に彼はテネシーとの離婚が成立すると，その後すぐにエリザベスと結婚をした。

エリザベスはミシガン大学出身の元教師で図書館学に造詣が深く，知識人との交際もあり，世話好きな女性であった。

劇評論家で作家でもあるスターク・ヤング(Stark Young)は作家志望のウィリアム・フォークナー (William Faulkner) をエリザベスの経営する書店で雇って欲しいと彼女に紹介した。フォークナーの将来を考えて，彼女は彼の処女作を発表出来るように，アンダソンに頼んでいる。[12] アンダソンはエリザベスの頼みを快諾し，フォークナーの処女作 *Soldiers' Pay* をリヴァライト (Liveright) に推薦して，1926年にそれは出版のはこびに至った。[13]

1924年9月には，アンダソンとエリザベスはニュー・オーリンズに転居し，その頃から彼は講演旅行を始めるようになった。1926年5月にはリプシン (Ripshin) に転居した。1927年には，マリオンの週刊新聞 *Marion Democrat* と *Smyth County News* を買い取り，アンダソンが，自ら，編集と執筆を始めた。

1969年，エリザベスはゼラルド・R・ケリー (Gerald R. Kelly) と共著を出版している[14]が，それはアンダソンとの結婚生活から離婚後の生活にもふれている。更には，アンダソンとエリザベスが Stein, Hemingway, Faulkner 等その他有名な作家と交友関係にあったことにも触れている。

エリザベスは，1924年から1933年まで，アンダソンの3度目の妻であったが，実際には1929年1月に彼と別居することになった。その時，彼は彼女に自分のもとには二度と戻らない方が彼女のためだと忠告している。1929年1月16日付のアンダソンからファーディナンド・シェヴル (Ferdinand Schevill) に出された手紙からは，過去に離婚した女性3人に対するアンダソンの同情とも解釈出来そうな内容を認めることが出来る。しかし，これからは自責の念は読みとれない。

I only mean that poor E. is very, very nice—much nicer than I will ever be—and I do not want her any more. C. and T. were nice too. Why should I not face myself— a wanderer.[15]

エリザベスは「無一文のシャーウッド・アンダソン」が好きであったが，離婚理由はアンダソンがエリザベスの水準に合わせることが出来なかったからである。[16]

エリザベスは，離婚後，当時メキシコの Tulace University で建築学の教授をしていたウィリアム・スプラトリング (William Spratling) という友人の居所の近くに転居した。

エリザベスもコーネリアと同様に，理知的で，しかも世話好きで，包容力があり，アンダソンにとって彼女は，彼の幼年時代にアンダソン家の支柱として家族を養い，子供達に限りない愛を与えた，まさに実母的存在であった。

アンダソンはエリザベスにも，やはり母親のイマーゴを無意識的に追い求めていたのであろう。従って，コーネリアに対すると同様に，アンダソンはエリザベスに対しても彼の心情としては離れ難いがエリナー・コペンヘィヴアーと結婚するためには，その犠牲も止むをえなかったのである。

（4度目の妻エリナー・コペンヘイヴァー）

アンダソンはエリザベスと離婚する数年前に，正確には1929年にヴァージニア州マリオンでエリナー・コペンヘィヴアーと知り合った。

エリナーに様々なことで勇気づけられて，アンダソンはマリオンで午前中執筆に精を出した。[17] やがて，彼らは熱烈な恋をし[18]，結婚を決意した。1933年6月，アンダソンはエリナーの父親バスカム・E・コペンヘィヴアー (Bascom E. Copenhaver) に手紙を出しているが，その中で，エリナーと恋愛中であり，彼女との結婚が最高の幸福だと考えていることや，自分達の結婚に承諾して欲しいこと等を述べている。[19]

1933年7月，アンダソンとエリナーは結婚した。その後，彼は精力的に

No Swank (1934) や *Puzzled America* (1935) や *Home Town* (1940) といったエッセイ集や戯曲 *Plays: Winesburg, Ohio and Others* (1937) を出版したり，講演も続けた。1939年には *Sherwood Anderson's Memoirs* の準備に取りかかり，1940年には意欲的に執筆した。しかし，アンダソンは不慮の事故によりパナマ運河地帯のコロンで他界したために，その大冊については彼の存命中には日の目を見ることは出来なかった。彼が他界した翌年1942年に，それは *Sherwood Anderson's Memoirs* という書名で刊行され，遺言によりそれをエリナーに献じている。

Sherwood Anderson's Memoirs の中で，アンダソンは "I am reluctant to discuss my marriages." と前置きして *Vanity Fair* (1914—1935)の編集長をしていたフランク・クラウニンシールド (Frank Crowninshield) と結婚について話合ったことがある。結婚についてアンダソンのような考え方をしている男は間違っているし，もっと人生を真剣に考えなければいけないとフランクはアンダソンに忠告している。更に，アンダソンはこの本の中で "My first three marriages each lasted exactly five years."(20) と述懐している。

エリナーは社会的意識の強い女性で，アンダソンもまた，自らの幼年期を振り返った時，有能な馬具製造業者であった父親から仕事を奪い取った時代の趨勢，所謂農本主義から機械工業による資本主義を憎まずにはおれず，社会主義ないし共産主義に次第に傾倒していった。エリナーとアンダソンは南部の工場を多く訪れ，労働者やストライキをしている人達を励ました。

アンダソンはエリナーと同じ目的意識を抱いたために，彼女との結婚生活は彼の過去のそれらと比較されると，おそらく最も有意義で心に張りのあるものであったであろう。

アンダソンがエリナーと熱烈に恋愛をし結婚をしたのは，彼のリビドーが依然としてエディプス・コンプレックスの段階に定着しているので，無意識的に母親のイマーゴを彼女に求めた結果であろう。

（マリエッタ・D・フィンリー）

マリエッタ・D・フィンリー（後の Mrs. E. Vernon Hahn）宛のアンダソンの書簡は1917年から1930年代にかけて，約300通あり，それらはシカゴのニューベリー・ライブラリー(Newberry Library)に寄贈されている。[21] これらの手紙の内容は主にアンダソンの結婚や妻や子供や著書に関するものである。

I am trying with all my might to be and remain a lover. All this writing is addressed to my beloved.

I am writing these snatches of things to women, to all women, to one woman. I am telling her of my life, of a man actively engaged in the grim wrestle of modern industrial life.

The wrestler is myself. I tug and pull at my opponent, Reality. Sweat rolls from me. Occasionally I cry out with pain.

My woman is made up of all the women in the world. She is no longer young nor is she old. She is beautiful.

You have something of that woman in you. All women have.[22]

Tennessee will be with me in New York in September and later I shall come west for a month or two.[23]

I have seen almost no one...Tennessee is here and we go often in the afternoon on sightseeing trips. I plan to write long weekly letters to the children about the city and get notes during these trips.[24]

T[ennessee] and I went [from Chicago] last Sunday for the day with the children [in Michigan City, Ind.]. Robert had made a puppet theater that was really wonderful. In the late afternoon when the light failed they gave a show. It was a strikingly nice thing they had done. All the family seemed happy. Mimi [aged 7] has begun to pass out of infancy and become a little girl. It seems to me that Cornelia is happier and is learning better how to handle her life.[25]

Letters of Sherwood Anderson には1916年11月6日付から1940年12月27日付までの書簡401通を収録しているが，その中にはマリエッタ宛のアンダソンの手紙は一通も含まれていない。マリエッタのものは *The Road to Winesburg* に数通と，その他の書籍に1，2通含まれている程度である。マリエッタ宛のアンダソンの手紙はまだ大部分が刊行されていないのである。従って，アンダソンとマリエッタの関係を知るためには，ニューベリー・ライブラリーに寄贈された約300通の手紙をクロノロジカルに目を通すのが理想的研究姿勢であろう。しかし，現時点では不可能である。ここでは，アンダソンの精神分析の結果を利用することによって，少なくともマリエッタに対するアンダソンの心情を次の数項目から考察しておこう。

1．アンダソンがマリエッタに宛た300近い手紙を単純に計算してみると，2週間に1通の割で手紙を書いたことになる。これ程までに多くの手紙を書くのは恋人かあるいは最も信頼した友人でなければ考えられない。
2．アンダソンのリビドーはエディプス・コンプレックスの段階に定着している。
3．アンダソンの恋愛態度は大槻憲二の5ヵ条件の中のいずれかによる。
4．アンダソンはマリエッタ・D・フィンリーを M.D.F. と略して *Sherwood Anderson's Notebook* を献じている。フル・ネイムで表わしてないのは人目を避けてのことであろう。
5．アンダソンのマリエッタ宛の約300通に近い書簡のうち刊行されているものに目を通してみると，主としてアンダソンの結婚や妻や子供達や著書に関する内容が多い。

以上5項目からみて，アンダソンの恋愛態度はおそらく大槻憲二の5ヵ条件の中の第1番目の傾向が見られるようである。即ち，アンダソンはマリエッタに対して高尚な純潔な女性として，それを性交と結びつけて考えるというような事は思いもよらないものとして考えている。アンダソンとマリエッタの関係は，丁度アンダソンの著書 *The Triumph of the Egg* (1921) の中の一編 "Brothers" に登場する職工長とアイオワ州出身の女性のそれに似ている。即ち，アンダソンはマリエッタに愛を感じているのだが，あ

る一線までは近づいてもそれ以上は接近しない。接近しようとしてもそう出来ないのである。アンダソンにとってマリエッタは手の届かない，まるで夜空の美しく輝く星のような存在なのである。あるいは，アンダソンとマリエッタの関係に於て，これを断定することは出来ないが，マリエッタはアンダソンにとって自分を見守っている母親的存在であったかもしれない。しかし，いずれにしても精神的には，夫婦関係以上の絆が一方的にアンダソンからマリエッタに向けられていたのであろう。

IV

アンダソンのリビドーがエディプス・コンプレックスに定着していることに，彼は気がつかないまま64年の生涯を終った。彼は4人の女性と結婚し，1人の女性と所謂プラトニック・ラヴを経験したが，彼女等は誰も彼を憎んではなかった。否，憎めなかったのであろう。その理由の一つとして，リビドーがエディプス・コンプレックスに定着しているが故にアンダソンには優柔不断の影があり，それを返せば，所謂甘えの要素が存在していたからであろう。これは勿論母親への依存を意味している。

ここには，アンダソンが生涯固執しつづけた作品のテーマも潜んでいる。即ち，アンダソンは精神的には母親と夫婦関係にあったが，彼女の他界を区切りに彼女のイマーゴを追い求めるようになったのである。母親の不幸の原因を考えると，自然に父親への憎しみを誘発し，同時に有能な馬具製造業者であった父親から仕事を奪い取ってしまった機械工業の到来に強い反発を覚えたに相違ない。故に，作品に於て，アンダソンは機械工業以前の社会への復帰を主張し，人間性の回復を望み，人と人との真のつながりをテーマとしているのである。

（最後に，拙稿の一部を本稿に転載することを許可して下さった明治出版社に厚くお礼を申し上げたい。）

注

(1) シャーウッド・アンダソンは旅行好きであったのか，それとも放浪癖があったのか，またあるいは現実から逃避したかったのかは，彼を精神分析しなければ結論が出ないので，ここでは常識的な表現に止めておく。

(2) Anon. "To Bury Anderson in Virginia." *New York Times* (19 March), p.21.

(3) Sherwood Anderson, *A Story Teller's Story* (New York: The Viking Press, 1969), p.7.
Mother was tall and slender and had once been beautiful. She had been a bound girl in a farmer's family when she married father, the improvident young dandy. There was Italian blood in her veins and her origin was something of a mystery.
更に *Sherwood Anderson: Short Stories* (New York: Hill and Wang, 1962), p.123. にも言及している。Such bound children were often enough cruelly treated. They were children who had no parents, slaves really. There were very few orphan homes then. They were legally bound into some home. It was a matter of pure luck how it came out.

(4) Sherwood Anderson, *Sherwood Anderson's Memoirs* (University of North Carolina Press, 1969): As a lad and in the small Ohio town where I spent most of my boyhood I was known by the nickname of "Jobby"...(p.26)
The name of "Jobby" came to me from my fellow citizens of my Ohio boyhood town because of my insatiable hunger for jobs. (p.27)

(5) 大槻憲二著『愛慾心理学　総論篇』(育文社, 1971) pp.81–82.

(6) Ben Hecht, *Letters from Bohemia* (New York: Doubleday & Company, Inc., 1964), p.87.

(7) *Letters of Sherwood Anderson.* Selected and edited with an Introduction and Notes by Howard Mumford Jones in Association with Walter B. Rideout. (Boston, Mass.: Little, Brown, 1953), p.112.

(8) Ernestine Evans, "A Lively Sculptor." *Nation* 124 (16 February, 1927), pp. 192–194.

(9) Martha Mulroy Curry, *The "Writer's Book" by Sherwood Anderson* (Metuchen, N.J.: The Scarecrow Press, Inc., 1975), pp. 72–73.

(10) William A. Sutton, *The Road to Winesburg* (N.J.: The Scarecrow Press, Inc., 1972), p.250.

(11) *Letters of Sherwood Anderson*, p.102.
(Letter from Anderson to Lucile Blum, Reno, July 1, 1923) E[lizabeth] is well. She makes me always happy to be in her presence. I love her as I have no one else. It is rather odd how little influence any of my other women have had on me.

(12) Stark Young, *The Pavilion: Of People and Times Remembered, Of Stories and Places* (New York: Charles Scribner's Sons, 1951), pp. 59–60.

(13) フォークナーの処女作 *Soldiers' Pay* が日の目を見るに至った経緯は次の書簡に見ることができる。
Letters of Sherwood Anderson, pp. 145–146.
(Letter from Anderson to Phil Stone, August 17, 1925) I had a letter

from Mr. Liveright, who said that two of his readers were enthusiastic about Bill's novel, the third reader not so enthusiastic. He was to read it himself and decide. I have a hunch he will take it.

I am very sure, however, that Bill's novel neither wants or needs an introduction by me. If Mr. Liveright wants me to write a blurb for the outside paper jacket, I'll be glad to do it, as I certainly admire Bill's talent. The jacket serves the purpose wanted without being a part of the book itself.

(14) Elizabeth Anderson and Gerald R. Kelly, *Miss Elizabeth: A Memoir* (Boston: Little, Brown and Co., 1969)

(15) E. は Elizabeth を, C. は Cornelia を T. は Tennessee を指す。

(16) Meg Donaghev, "Taxco: The Silver City." *Mexico City News Vistas* (December 8, 1974), pp.3–4. 参照

(17) Meg Calhoun, "Authentic American Voice." *Smyth County News* (25 July, 1972), Supplement, p.16.

(18) *Letters of Sherwood Anderson*, p.220.
(Letter from Sherwood Anderson to Ferdinand and Clara Schevill, Troutdale, Virginia, after July 13, 1930)
...Of course I'm in love. A little dark-eyed, Italian-looking woman. I dare say I have to love. I can't go out indirectly in work unless, as a relief, I can go out directly to one person.
If I don't do it, nothing sings in me, nothing flames up.
I go stale and limp like an old man's pecker.
So I love again and work, and it seems to me I never love before.

(19) *Ibid.*, pp. 289–290.

(20) *Sherwood Anderson's Memoirs*, p.7.

(21) Anon. "Library Notes." *Newberry Library Bulletin*, 6 (November, 1962), pp.31–32.
マリエッタ・D・フィンリーは手紙の他に *Marching Men* の原稿も同図書館に寄贈している。尙, *The Road to Winesburg* (p. vii)によると, アンダソンが投函したマリエッタ宛の手紙は1916年から1931年の間に 275 通であると述べている。

(22) Letter from Anderson to M.D. Finley, 1916.

(23) Letter from Anderson to M.D. Finlry, August 1918.

(24) Letter from Anderson to M.D. Finley, September 1918.

(25) Letter from Anderson to M.D. Finley, Jan. 1919.